

どうすれば日本の学力を上げられるか

中3-D-17 木村 みのり

目次

はじめに

第1章 日本の学力の現状

第1節 学力とは

第2節 国際的に見た日本の学力

第2章 日本の今までの教育改革

第1節 学習指導要領とは

第2節 日本の今までの学習指導要領の流れ

第3節 詰め込み教育とゆとり教育

第3章 現在の日本の学習指導要領

第1節 3つの柱とアクティブ・ラーニング

第2節 「主体的・対話的で深い学び」と総合的な学習の時間

第4章 自分なりに考察した教育改革

第1節 学校で授業を受けていて感じること

第2節 アクティブ・ラーニングをより普及させるには

おわりに

参考文献

はじめに

最近、テレビの情報番組や書籍で日本の学力の低下が危惧されてるように感じる。私もたまにそのような番組を見ることがあるが、本当に日本の学力は下がっているのか、下がっているならばその原因は何なのか、学力を上げることはできないのかが気になり、このテーマを調べることにした。

私ははじめ、世界の学力ランキングで上位の大学の学習方法やシステムを参考にすれば良いのではないかと考えていた。しかし、調べてみると海外(今回は特にアメリカ、イギリスに重点を当てた)と日本では国の方針や施設のつくりなど、大きく異なる面が多々あり、比較するのが難しかった。

そこで、今までの日本の学習指導要領を調べ、それぞれのメリット、デメリットからよりよいものを作ることができないか考えることにした。

第1章 日本の学力の現状

第1節 学力とは

そもそも、「学力」とは何なのか。大辞林 第二版によると、「学校などにおける系統的な教育を通じて獲得した能力。教科内容を正しく理解し、それを知識として身につけ、その知識を応用して新しいものを創造する力。」と書かれている。一つ目の意味はテストの点数など、「成果」としてあらわれる学力のことであり、二つ目は学習することそのもの(つまり「学ぶ力」)としての学力である。では、授業で行う教科学習以外の、習い事をすることは学力につながるのだろうか。調べてみると、それらは「学力」には含まれないことがわかった。言葉の定義というものは世間一般が定めるものであるため、現在では、学問以外の能力に長けている人の学力が高いと考える人はほとんどいない。(ただ、言葉の定義というものは時代とともに変化するため、今と昔の「学力」が全く同じ意味で使われていたとは限らないし、将来また変わる可能性もある。)

ちなみに、第3章で詳しく述べるが、今の日本で必要だとされている学力について、文部科学省は“現在子どもたちに求められる学力とは「確かな学力」である”としている。

「確かな学力」とは、知識や技能に加え、学ぶ意欲や自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断して行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等までを含めたものである。

第2節 国際的に見た日本の学力

実際、日本の学力は下がっているのだろうか。国内外様々な学力を図るテストや調査があるが、今回はその中のPISA(Programme for International Assessment)と呼ばれる国際的な学習到達度調査を見てみることにする。PISAを選んだ理由は、15歳児(日本では高校1年生)を対象としているため自分により身近だと感じたからだ。また、私がよくニュースでみていた「日本の学力低下」の根拠としてこの調査結果が使われていることが多いのも理由の一つである。

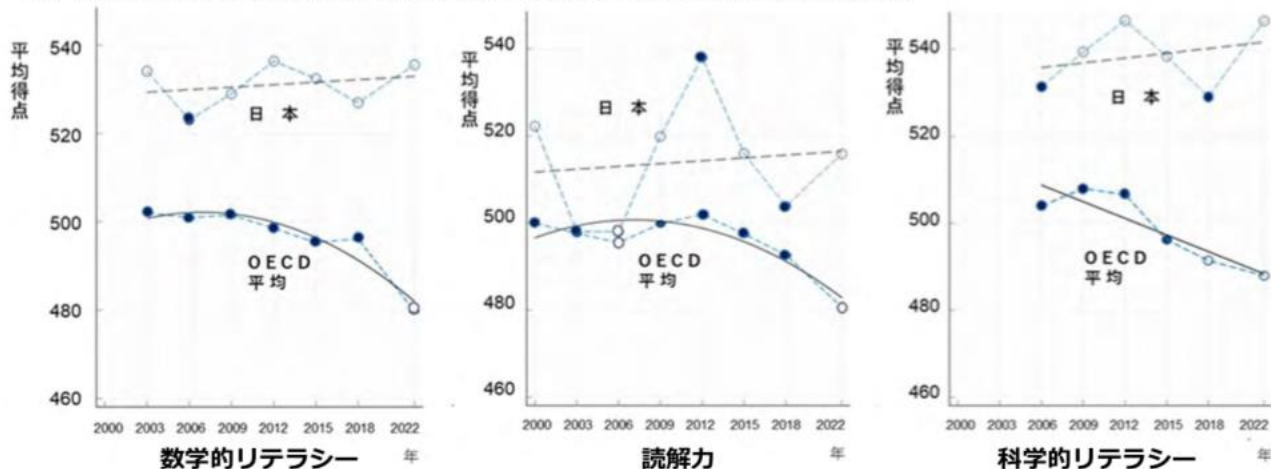
PISAはOECD(経済協力開発機構)が行う世界的な学力調査で、2000年から3年ごとに行われ、2022年(2021年分が新型コロナウイルスの影響で一年伸びた)に行われた調査が8回目である。日本は初回から参加していて、参加国・地域は2022年の調査で81カ国・地域であった。調査の目的は義務教育を終える15歳までに学んだ知識や技能を、実生活でどの程度活用できるかを測ることで、調査の結果を国別に比較することによって各国が自分の国の強みや弱みを知り、より良い教育を作っていくことである。

PISA調査には「科学的リテラシー」「読解リテラシー」「数学的リテラシー」の3分野があり、日本の順位・平均点は次のグラフのようになっている。



毎日新聞 <https://mainichi.jp/articles/20231205/k00/00m/040/244000c>

(注) 白丸はPISA2022年の平均得点を統計的に有意に上回ったり下回ったりしない平均得点を示す。



https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2022/01_point_2.pdf

この二つのグラフから一概に日本の学力のレベルを判断することは難しいが、順位の上昇・下降傾向に基づいて推定することはできる。例えば、2003年・2006年では特に学力が低下しているのが読み取れるだろう。実は、2003年はPISAショックと呼ばれた時期でもあり、日本の学力低下がPISAテストで顕著に現れたのである。この結果が「ゆとり教育」の批判をさらに過熱させ、その批判に対応するように学習指導要領が改定された原因の一つでもあるのだが、それほどPISAは日本の教育改革に影響を与えているのである。では、実際にこの二つのグラフから日本の学力が本当に低下しているのか、どのような傾向があるのか読み取れないだろうか。より正確に考えるならば、このPISA調査だけでなく他の調査データも活用すべきだが、今回は「日本の学力が下がっているかどうか」よりも「どうすれば学力を上げられるか」というテーマを追求したい。そのため、前記の二つのデータから読み取れることは「日本の学力が上がり続けているとは言い切れない。よって改善の余地がある」ということをここでは示しておきたい。以上の理由より、他のデータとの比較はしていない。

第2章 日本の教育改革

第1節 学習指導要領とは

ここまでの話と一変するが、ここで一度日本の今までの教育改革についてみていきたい。まずは、日本の教育改革に欠かすことのできない学習指導要領について簡単に説明しようと思う。

学習指導要領とは、日本のどの地域で教育を受けても一定の水準の教育を受けられるようにするために文部科学省が定めている、各学校で教育課程を編成する際の基準のことである。教科書や時間割はこれをもとに作られている。学習指導要領は戦後すぐにアメリカの学習指導を参考に作られ、昭和33年から現在のような大臣告示の形で定めら

れるようになった。昭和 33 年以来、ほぼ 10 年毎に改定されているもので、2017 年の改訂が 8 回目の改訂である。今回の課題研究 jr. ではこの学習指導要領に基づいてこれまでの日本の教育改革をみることにする。

第2節 日本の今までの学習指導要領

先ほど軽く述べたものだが、学習指導要領は社会にも大きな影響を与えているものであるため、学習指導要領を調べることで教育改革の歴史を知ることができると考えた。以下はこれまでの学習指導要領の特徴(主に高等学校学習指導要領)を簡単にまとめたものである

	主な特徴	時代背景
初刊行	アメリカ版学習指導要領をもとに作られた「試案」 経験主義や児童中心主義の教育観	第二次世界大戦後、GHQ の指導のもと作成
昭和 33～35 年改訂 (1958-1960)	経験主義カリキュラム→基礎学力向上を目指す	高度経済成長期に突入し、科学技術教育に重点が置かれた
昭和 43～45 年改訂 (1968-1970)	教育内容の現代化と高度化 戦後から現在で最も内容が多い指導要領 詰め込み教育	ソ連の人工衛星打ち上げ成功に伴いブルーナーの「教育の過程」が話題に
昭和 53～55 年改訂 (1978-1980)	「人間性豊かな児童生徒を育てる」ゆとりある充実した学校生活を送れるように ゆとり教育 の始まり	「詰め込み教育」や「落ちこぼれ」の社会問題化
平成元年改訂 (1989)	関心・意欲・態度を育成する「新学力観」へ さらなる学習内容の削減	「いじめ」「不登校」「校内暴力」の続出
平成 11 年改訂 (1999)	「総合的な学習時間」「選択教科」の増加による教育内容はさらに削減	OECD や ILO(国際労働委員会)からの日本人の労働時間短縮についての要望を受け、完全週 5 日制(平成 14 年から)への移行間近
平成 15 年改訂(2003)	平成 11 年改訂の一部訂正	教育内容削減への批判

平成 20 年改訂 (2008)	「生きる力」の育成 (生きる力:社会の変化に関 わらず自ら課題を見つけ、 学び、考え、主体的に判断 し、行動してよりよく問題 を解決する能力)	国際的な学力調査の結果低 迷。技術革新やコンピュー タの発展により学校教育の 中身が社会の変化のスピー ドについていかなくなっ ていった
平成 31 年改訂 (2019)	1 知識及び技能・思考力 2 判断力、表現力等 3 学びに向かう力、人間性 等の3つの柱 「主体的・対話的で深い学 び」	選挙権年齢が 18 歳以上に 引き下げられ、社会で必要 なことをもっと教えるべき だという考え方が広まる

第3節 詰め込み教育とゆとり教育

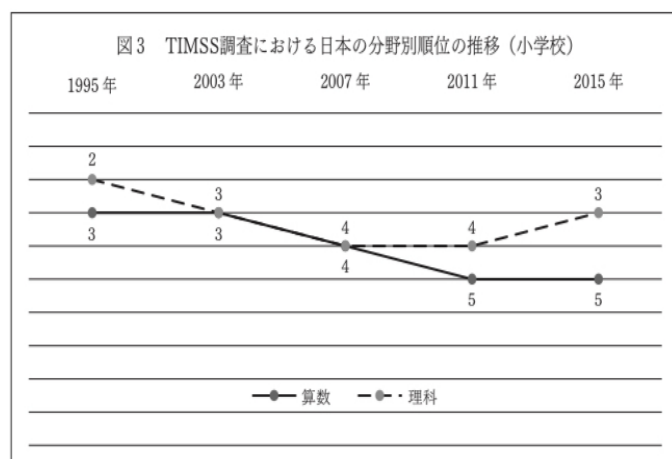
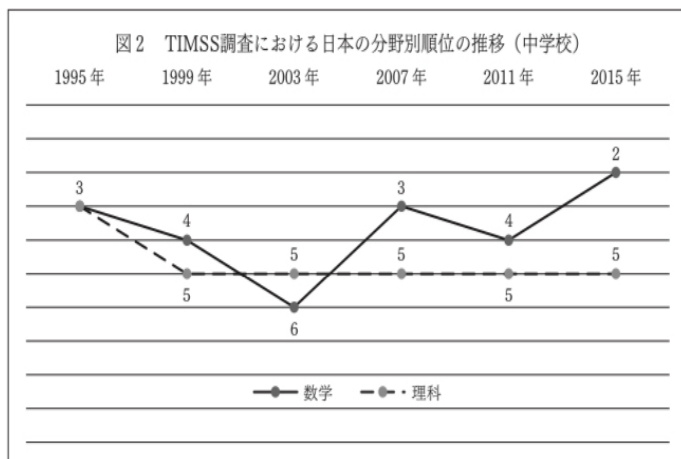
詰め込み教育やゆとり教育という言葉聞いたことがある人は多いと思う。名前の通りとにかく知識を詰め込む「新幹線授業」(教育内容が多く、新幹線のようなスピードで授業が進むことを揶揄したもの)が行われたのが詰め込み教育で、授業時間や授業内容を削減することで子どもたちが自ら学び考える力の育成を目指したのがゆとり教育だが、日本の今までの学習指導要領の中でわかりやすく対照的なものだと思い、比較してみたことにした。どちらの教育方針も批判され、詰め込み教育からゆとり教育に、ゆとり教育から現在の「生きる力」を養う学習方針に、変わってきたわけだが、詰め込み教育もゆとり教育も顕著な学力低下が現れた結果改革されたわけではない。ゆとり教育への批判は、学力低下への「危惧」から生まれたものであり、ゆとり教育と学力低下の因果関係を直接的に示すデータはないのである。詰め込み教育においては落ちこぼれや校内暴力といった、人間性などの社会問題の表面化が特に批判されたため、学力低下とはまた違う視点である。そのため詰め込み教育やゆとり教育を肯定的に捉えている大学教授や研究者もいる。今回はそのような考え方を持つ人々の論文や記事と、詰め込み教育やゆとり教育を批判している人々の論文や記事からそれぞれの改革のメリット・デメリットを自分なりに考えてみた。また、詰め込み教育やゆとり教育を肯定的あるいは否定的、どちらに捉えるかにより、各研究者ごとに検証したデータなどがあるが今回の目的とは少しズレるため省略する。

メリット

デメリット

詰め込み教育	<ul style="list-style-type: none"> ・判断材料となる知識がつく ・歴史など暗記が基礎学力をつける科目に適する ・反復学習に必要な能力を磨くことができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・勉強についていけない子供が増加する ・勉強に対するモチベーション維持をしにくい ・覚えたことの応用がききにくい
ゆとり教育	<ul style="list-style-type: none"> ・休みが増えるため習い事など好きなことに時間が使える ・基礎学習が充実する ・自分がしたいことを考える余裕ができ、心に余裕ができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・増えた休みをどのように活用するかは本人次第で必ずしも有効に使えるとは限らない ・暗記など学習能力を磨く機会が減る ・学習最低ラインを定められるため、どのレベルまで教えるかは教師の判断に左右される

ところで、本当に詰め込み教育・ゆとり教育は失敗したのだろうか。先ほどから何度か述べているが、詰め込み教育は学力低下よりも社会問題増加が顕著に現れてしまった。つまり、詰め込み教育のような教育方針では人間性という必要なパーツが欠けてしまったといえるため、詰め込み教育は失敗である、もしくは大幅な改善が必要であるといえるだろう。では、ゆとり教育はどうだろうか。先ほどゆとり教育の特徴としてゆとり教育の成果を表すデータがないと書いたが、実はまったくないわけではない。第1章で示したPISA調査の日本の順位グラフで2009年、2012年のデータを見ると、どちらも三分野全てで順位が改善されているのが分かるだろう。2003年の大幅な学力低下から2009年、2012年の学力向上、これらの流れは「脱ゆとり」路線の成功だと言われがちだが、本当にそうだろうか。実際、「ゆとり教育」が導入されたのは2002年からであり、PISA2003年を受験した世代は1年(それも移行措置段階)しか「ゆとり教育」を受けていない。それに対して2009年の調査を受けた世代は2002年から2009年までゆとり教育を受け続けた世代であるし、2012年の調査を受けた世代は小学校6年間全てゆとり教育のカリキュラムだった世代である。つまり、この2009年、2012年のPISA調査による学力向上はむしろ「ゆとり教育」の成果が表れたもの、とさえ呼べるのである。もちろん、偶然PISAが改善されただけかもしれないという意見も出るだろう。しかし、TIMSS(Trends in International Mathematics and Science Study)という、IEA(国際教育到達度評価学会)が実施している算数・数学及び理科に関する国際的な到達度評価をみると下のようになっている。



出典: 国立教育研究所『国際数学・理科教育動向調査(TIMSS)』各年度版報告書

中学校のグラフを見るとやはり 2007 年の数学の順位は大幅に上がっている。理科に関しては変化はしたが、下がっているわけではない。また、小学校の順位は落ちているものの、参加地域が 25 カ国から 36 カ国と増えたこともあり低下したと断言するのは難しく、また、ゆとり教育が失敗だったことを示唆するほど大幅に低下しているわけでもないのは分かるだろう。PISA と TIMSS の二つの結果だけでゆとり教育が成功したと捉えるのは安直だが、ゆとり教育は必ずしも失敗であるとは言い切れないのも事実である。

第3章 現在の日本の学習指導要領

第1節 3つの柱とアクティブ・ラーニング

今までの学習指導要領を見てきたが、実際今の日本の教育界で重視されていることがなんだろうか。もちろん、先ほどの表にあるように、子供達に必要な力を 3つの柱「学力の三要素」として整理したことは大きなポイントである。「知識・技能」の柱では基礎的な学問や技術、文化、歴史、地理などの知識や技能を身につけることが目標とされている。また、情報リテラシー能力や国際理解などの能力も含まれる。「思考力・判断力・表現力等」の柱では未知の状況にも対応できる問題解決能力や批判的思考力、創造力、コミュニケーション能力、表現力などを育成する。これらの能力の育成には活発的なディスカッションや発表が大事だとされている。3つ目の柱である「学びに向かう力・人間性等」では、主体的な学習や自己表現力、協働力、感性や思いやりが育成される。これらの能力には目標設定や自己評価、グループワーク、社会体験活動などが重要だとされている。

また、今回の学習指導要領での大きなポイントの一つにアクティブ・ラーニングというものがある。文部科学省による定義では、「学習者の能動的な参加を取り入れた授業、授業法の総称」となっている。具体的には教員による一方向的な講義形式の教育ではなく、グループワークやディベートなど、学修者(児童、生徒、学生等)が受け身でなく自ら学びに向かうように設計された学習法のことを指す。当初、「アクティブ・ラーニング」という言葉は学習指導要領などで多く用いられていたが、学習指導要領改訂に伴い「主体的・対

話的で深い学び」という言葉に置き換えられてきている。なぜ「アクティブ・ラーニング」という言葉ではなく「主体的・対話的で深い学び」という言葉に変わっていったのか。この二つの用語の違いは何なのか。結論から述べると、「主体的・対話的で深い学び」が目的で、「アクティブ・ラーニング」はその目的を達成する授業改善のための視点なのである。

「主体的・対話的で深い学び」とは、子供たちに「生きる力」を育むために「どのように学ぶか」という学び方のことである。つまり、「アクティブ・ラーニング」ではなく「主体的・対話的で深い学び」と言い換えることにより、内容がより充実するのだ。例えば、「対話的な学び」だと、教師と児童のやりとりだけでなく、子ども同士で学び合うことや地域社会とのつながりなどにも焦点が当たるようになる。

では、「主体的・対話的で深い学び」とは具体的にどのようなものなのか。少し詳しく見てみたいと思う

第2節 「主体的・対話的で深い学び」と総合的な学習の時間

「主体的・対話的で深い学び」とは、学習指導要領に記載され、推進が求められている教育体制のことを指す。「主体的・対話的で深い学び」について文部科学省はパブリック・コメントで寄せられた意見に対し、次のように述べている

『「主体的・対話的で深い学び」について、例えば、国語や各教科等における言語活動や、理科において観察・実験を通じて課題を探究する学習、美術等における表現や鑑賞の活動など、『これまでにも充実が図られてきた学習を、さらに改善・充実させていくための視点』であり、『今までの授業時間とは別に新たに時間を確保しなければならないものではない』”つまり、わざわざ授業時間を増やして行う必要があるものではなく、これまでの内容をさらに向上させることが重要であるということだ。文部科学省の資料によると、この「主体的・対話的で深い学び」の目的は、「子どもたちが生涯にわたり能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること」である。この目的を達成するために重要なもののひとつに、「総合的な学習の時間」というものがある。一般的にゆとり教育と言われている時代（平成10年の学習指導要領改訂時）に導入されたもので、「総合的な学習や探究的な学習を通じて自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し…（以下略）」と、自ら取り組むことを目標としているものである。これは一見「主体的・対話的で深い学び」を実現するために最も大切なもののように感じる。

しかし、平成20年の学習指導要領改訂で、総合的な学習の時間を活用することも重要だが、総合的な学習の時間で体験的な学習や課題解決的な学習を行うためには各教科で知識・技能を活用する学習時間を充実させることが必要であるとされ、総合的な学習の時間は以前に比べ削減されている。この時期がいわゆる「脱ゆとり」と呼ばれている頃である。削減された時間は主に理数教科の授業時数増加に回されているが、この授業時数の増加は「詰め込み教育」のように指導内容を増やすことが主な目的ではなく、反復学習や知識・技能を活用する学習（観察・実験やレポート作成など）を充実させるためだとされている。また、「総合的な学習の時間」にするべきことはある程度現場の教師に任せる形になっているため、有効に時間を使えていなかったり、「総合的な学習の時間」の準備にかかる時間がな

いほど教師が忙しかったりと課題もたくさん残っているのが現状だ。「総合的な学習の時間」の進め方については、学習指導要領改訂を重ねるごとに少しずつ具体的な例を出すなど対策をしたり、教師の時間のなさについては外部の講師を招いたり、改善されつつあるが、やはり講師を招くことは時間の縛り上厳しかったり費用の問題があったりとまだまだ改善の余地はあるように感じる。

第4章 自分なりに考察した教育改革

第1節 学校で授業を受けていて感じること

ここまでインターネットや著書を用いて現在までの教育改革を調べてきたが、実際に自分が中学生として授業を受けていると、「アクティブ・ラーニング」を取り入れ、生徒が発言することを重視しているような授業や基礎となる知識を教えられる授業など、様々なものがあるように感じる。そこで、どのような授業スタイルがあるか、それぞれの授業のメリット・デメリットを考え、本当に今の授業スタイルがっているのか考察することにした。

① 授業中に指名された人が回答する

いつ当てられるかわからないため、授業に集中できる。ただし、列ごとや出席番号など、次にあたる人が想像しやすいことが多いため当てられないという安心感も持ててしまうことがある。

② クラス全体に質問を投げかけられ、誰かが回答する

自ら声を上げることができるようになる。ただし、基本的に答える人が限られることが多い。答える人以外は誰かが答えてくれるの待つ姿勢になり、自分でその問いに対して考えなくなりがちである。また、誰も答えなければ授業が止まってしまう可能性もある。

③ 前後や左右で2人程度で話し合う

自分の意見を言いやすくなり、必然的に自分の意見を持たなければならなくなるため、自分で考えるようになる。ただし、ペアの相手との仲によって雑談に変わってしまったり意見を言い合えなかったりすることもある。

④ 前後左右の4人程度で机を動かしてグループを作り、ディスカッションする。それぞれのグループで出た意見を代表者1人が述べる

クラス全体に発表するよりも少人数で意見が言いやすくなり、一つの意見に対する反論も言いやすくなる。様々な人の意見を聞くことができ、物事を色々な視点で見ることができるようになる。また、誰が発表するか、どのように発表するかなど、グループの中でまとめる作業も行うため、要約する力も身につく。ただし、グループの中で率先して話の流れを作る人がいなければなかなか

話し合いが進まなかったり、発言力のある人の意見に流されたりすることがある。また、時間がかかり授業が進みにくい可能性がある。

私が普段受けている授業の多くがこの4つのどれかに当てはまるのだが、上にあげた特徴を踏まえてさらに詳しく考えてみようと思う。①②は自分の意見を発言する機会は減るが、授業は進みやすく、基礎知識など暗記が必要であるものを身につけるための授業には向いている。一方、③④はアクティブ・ラーニングの手法として注目されている手法の一つと言われているディスカッションである。授業を受けていても教師の話を一方向的に聞くのではなく、常に自分が小さなコミュニティの中にいるようなもので、会話をし考える作業が必要のため寝てしまう人や他の教科の勉強をするような人をほとんど見かけない。しかし、個人差はあるもののディスカッション形式の授業が続くとだんだんと疲れを感じるようになり、1時間まるまるディスカッションになってしまうとその授業の最後のほうや次の授業での集中力が続かなかったり、話題が逸れていったりする可能性がある。また、これは普段授業を受けていて感じることだが、普段あまりディスカッションをすることがないため、生徒だけでなく教師の負担も大きいのではないかと思う。アクティブ・ラーニングという用語やディスカッション形式授業は最近できたものではなく、もともとと言われていたことが近年重視されるようになってきているものだが、今まであまり行われてきたものではない(一部アクティブラーニングの手法を取り入れていた学校もあるが、少数である)。そのため、教師もどのように授業を進めるべきかよくわからず、ディスカッションの流れを思うように作れないこともディスカッション形式授業の難しさだと言われている。アクティブ・ラーニングについて調べると、ディスカッション授業の進め方について書いてあるサイトがたくさんでてくるが、それを読んでみると、サイトごとに多少違うもののほぼ全てのサイトで①議論しやすいテーマを選ぶ②制限時間を設ける③議論しやすい雰囲気を作る と書かれている。②についてはその場で対応できるものだが、制限時間の長さやテーマの深さにおいても試行錯誤が必要であるし、生徒の学力のレベルによっても異なってくるものである。また、①は少し曖昧で、③においては長期的に作り上げなければならない。たとえディスカッション授業の進め方をインターネットで調べられるとしても、全ての教室で同じ取り組みが成功するとは限らないし、今の教師の仕事量を考えるとアクティブ・ラーニングの手法まで調べる時間はないのではないだろうか。それが一つの文章を読むだけでなく、いくつかのサイトや文献を比較しなければならないのであるからなおさらだ。結局、ディスカッション形式の授業を進めるのが難しいことよりもそこに至るまでの準備の大変さや時間のなさ(もっと突っ込めば今の教師の仕事量の多さは教育界の人手不足によるものでもある)がいちばんの問題ではないか。そうだとすれば、いくらアクティブ・ラーニングの手法を説明したところで実現することはかなり大変なのである。こうなると、教師の仕事をもどのように減らすべきか、それとも授業スタイルも全て変えて仕事が少なくなるようにするべきかという話になってくる。第2節で教師の仕事減らす方法について考えようと思う。

第2節 アクティブ・ラーニングをより普及させるには

先に断っておくが、私は今回の課題研究 jr. を通してアクティブ・ラーニングは取り入れるべきだと考えている。やはり、授業の大変さを抜きにすれば「主体的な学習」にはとてもあっているように感じるからだ。また、授業を受けていてただ単に教師から教えられる授業よりも、自分たちで話し合ったことは記憶に残りやすいように感じる。そのため、今回の課題研究 jr. では「アクティブ・ラーニングはとり入れるべきである」として考える。

さて、教師の仕事量を減らす方法についてだが、私は2つの方法を考えた。一つ目は教師の数を増やし、一人当たりの仕事量を減らすことである。しかし、この方法は少子高齢化が進んでいる現在の日本ではあまり現実的ではないだろう。そこで二つ目である。AI を導入し、可能な限り事務处理的な仕事は機械がすることによって教師は授業に集中できるのではないか。AI の教育現場への導入は、すでにさまざまな場所で行われているが、やはりメリット・デメリットはつきものである。メリットとしては教師の負担軽減以外に子どもの学習能力に合わせた的確なアドバイスができることや成績の正確な分析などが挙げられ、デメリットとしては「学ぶ力」や「考える力」を教えることは難しいこと、考えの過程を言い換えなどを使って説明できなければ子どもの疑問が解消されないことなどが挙げられる。こうみると、思考力を鍛えたいとしている現在の教育方針には、デメリットが大きすぎるように感じる(将来AI が思考力まで考えられるようになれば別だが)。ただし、AI のデメリットはコストなどを除けば基本的にはAI が直接授業を行うことによって発生するものである。そのため、教育現場の事務的処理(採点や授業準備のサポートになるもの)に特化したAI を導入することは効果があるのではないか。現在すでに生徒にiPad やタブレット端末が配られたり、教師もスクリーンを使って(全ての学校ではないが)授業をするなど、IT 化が進んでいるように感じる。さらなる発展があるならば教師の仕事量の多さも少しは軽減されるのではないか。このように授業外でももっと活用できるようなAI を作る必要があることだと私は考えた。また、ディスカッション形式の授業を推進するのならば、もっと教師がそのような授業をしやすいように教師に対する講義を行ったり、教師同士で情報を交換したり、公開授業をしてお互い学び合う機会を作ったりと、教師1人1人に授業を任せきるのではなくサポートを充実させるべきだとも思う。アクティブ・ラーニングは近年重視されてきたことだからこそ、はじめに基礎となる知識を教師に伝えることも学校で子供が基礎から学び、応用へと発展していくことと同じことではないだろうか。

まとめ

第3章まででは今までの日本の教育について、第4章では第3章までで学んだことと現在授業を受けていて感じることからこれからの日本に必要な教育を考察した。私の結論としては

①授業でアクティブ・ラーニングを取り入れつつ、知識を教えることも怠らないようハ

イブリッド形式で進めること。

②教師がアクティブ・ラーニングなど新しい授業スタイルをできるようなサポートを充実させること。具体的には教師の仕事量を減らすために AI をもっとたくさん導入することやアクティブ・ラーニング形式の授業の進め方を共有することなどの2つである。

おわりに

私が今回この卒業論文で日本の教育について調べた中で、最も大変なことは学習指導要領を読むことだった。学習指導要領と一口に言ってもほぼ 10 年ごとに変わるため膨大な量があり、内容も難しい言い回しが使われていてなかなか理解できず、また、学習指導要領以外の様々な研究者の論文を読むことも大変だった。しかし、普段なら絶対に読むことのない学習指導要領を読んだことで、今自分たちがどのような教育を受けているのか、どのような教育体制を目指しているのかについて詳しく知ることができ、授業を受けているときにその授業内容(例えばディスカッション)が学習指導要領の一部と合致して身近に感じられるようになった。また、様々な論文を読む中で、同じ教育政策に対しても正反対の意見がたくさんあり、物事を見る視点はたくさんあるのだということに改めて感じた。これからは一つの物事でも様々な考え方があるということを意識し、自分の考え以外にどのような考えがあるか考えながら過ごしたいと思う。

テーマである日本の学力の向上方法については、最後に時間が足りず確かな考察はできなかったことが悔しいが、これから教育に関するニュースや記事を今まで以上に意識して読み、自分なりにさらに考察していきたいと思う。学力を上げるといってもどのような授業形式をとるか、どの分野に重点を置くかなど、思っていたよりも様々な視点で見なければならぬことがわかり、学習指導要領を作成している人々を尊敬するようになった。この卒業論文を書くまでは学習指導要領は批判されていることも多いため、学習指導要領はあまりすごいものではないのかと勝手に考えていたが、改訂を行なって批判にも対応するなど、本当にすごい仕事をされているのだなと感じている。機会があれば、学習指導要領に携わる仕事について、調べたり話を聞いたりしてみたいと思う。

この卒業論文を通して、はじめの情報集めの大切さや論文を書き始める時期は早くすべきなど様々なことが学べたため、これから論文を書くときにも活かしていきたいと思う。

最後になりましたが、1年間指導してくださった松谷先生、たくさん相談にのってくれた家族のおかげでここまで書くことができました。本当にありがとうございました。

参考文献

文部科学省 新学習指導要領について

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/044/shiryo/_icsFiles/afield

file/2018/07/09/1405957_003.pdf

文部科学省 子どもたちに求められる学力についての基本的な考え方

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1399855.htm

文部科学省 学習指導要領等の改訂の経過

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304372_001.pdf

東京大学大学院教育学研究科 戦後から現在までの教育界の大まかな流れ

<https://www.p.u-tokyo.ac.jp/lab/ichikawa/johoka/2008/Group1/kaiteimatome.htm>

文部科学省 平成 29・30・31 年改訂学習指導要領(本文、解説)

https://www.mext.go.jp/content/1421692_2.pdf

寺子屋朝日 for teachers

<https://terakoya.asahi.com/article/14922225>

文部科学省 学習指導要領改訂の基本的な考え方に関する Q&A

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/qa/kihon.htm

文部科学省 総合的な学習の時間について

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/064/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/01/07/1365764_3.pdf

文部科学省 新しい学習指導要領の主なポイント(平成 14 年度から実施)

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320944.htm

NOLTY プランナーズ 「主体的対話的で深い学び」と「アクティブラーニング」の違いと概要

https://www.noltyplanners.co.jp/schola/inquiry-program/column/1281397_9953.html

文部科学省 新しい学習指導要領の考え方

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf

Educedia 「アクティブ・ラーニング」と「主体的・対話的で深い学び」の違いは？

<https://www.educedia.org/entry/2018/02/11/235411>

国立教育政策研究所 OECD 生徒の学習到達調査(PISA)

<https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/#:~:text>

ベネッセ教育情報 PISA とは？これまでの日本の順位や調査のポイントを解説

https://benesse.jp/educational_terms/30.html

学力(ガクリョク)とは？意味や使い方-コトバンク

<https://kotobank.jp/word/%E5%AD%A6%E5%8A%9B-43871#:~:text=%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E6%95%99%E8%82%B2%E6%B3%95%EF%BC%88%E7%AC%AC30,%E4%B8%89%E3%81%A4%E3%82%92%E3%81%BE%E3%81%A8%E3%82%81%E3%81%A6>

文部科学省 子どもたちに求められる学力についての基本的な考え方

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1399855.htm

nobico/のびこ 日本の学力低下の原因は？

https://family.php.co.jp/2023/12/20/post_13130/#:~:text=PISA%E3%81%AB%E8%A1%A8%E3%82%8C%E3%82%8B%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AE,%E3%81%AE%E3%81%8C%E3%81%8D%E3%81%A3%E3%81%8B%E3%81%91%E3%81%A7%E3%81%97%E3%81%9F%E3%80%82

文部科学省 「生きる力」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo10/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2009/12/17/1286933_4_1.pdf

スクールポット 2020年2月号ゆとり教育の成果と課題

<https://www.schoolnetwork.jp/jhs/maniastax/2020-02/index.php>

いしど式そろばん教室 今だから知っておきたい「ゆとり教育」と「詰め込み教育」の違い

<https://www.ishido-soroban.com/matome/437/>

キャリア教育ラボ アクティブラーニングにおけるディスカッションの進め方

<https://career-ed-lab.mynavi.jp/info/2511/>

大東文化大学 日本の学力は低下しているのか

<http://www.ic.daito.ac.jp/~uriu/thesis/2003/hirabayashi.html>

Alsmiley AI を教育現場に導入するメリット・デメリットとは？活用事例を紹介

https://aismiley.co.jp/ai_news/what-are-the-advantages-and-disadvantages-of-ai-for-education/